
Beholder

iku612

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beholder

【コード】

N3861U

【作者名】

iku612

【あらすじ】

在原見鶴はあらゆるものを見通すことができた。

一時は化け物と諦めた力も、日常の中で薄れていくが……。

プロローグ

僕こと、在原見鶴はあらゆるものを見通すことができる。過去から未来、人の心、遠くの物から生き物の寿命まで。ただし、万能ではない。

使えば使うほど疲れるし、それぞれ発動する条件も違う。

初めて能力に気がついたのは小学三年生の頃。

遠くで起こった交通事故を見て、先生に話した。

先生は最初は笑っていたけど、次の日にそのことがニュースになってて驚愕していた。

細かいところまでピッタリと一致したから。

その日から僕は化け物扱いされた。

学校では友達から虐められ、先生たちからは変な目で見られるようになった。

家に帰ると家族はいたけど、僕とは関わらないようにしていた。近所の人たちも遠くから見ただけで、助けてはくれなかった。妹の隣以外には、僕には居場所なんてなかった。

だけど、そんな生活もお仕舞い。

この春、僕は独立した。

大きな荷物を背負ってローカル線に乗り込む。

引越し業者に頼めるほどお金は持ってなかったから、自分で全部持つことになった。

こんな大荷物を持つてると都心の電車だと睨まれるだろうけど、幸いにも僕の他には数人しか乗っていなかった。

「あなた、大荷物なのねえ？」
席に座った僕に話しかけてきたのは、向かいに座っていた感じのいいお婆さん。

「はい。これから一人暮らしをするので」

「若いのに大変だねえ」

「いえ。僕が望んだことなので」

微笑みながら答える。

流石に見ず知らずの人にガン付けるほど僕に度胸はない。

そのまま雑談に花を咲かせる。

元々話し上手ではない僕だけど、お婆さんは時折頷きながらきちんと聞いてくれた。

どうやら随分と話し込んでしまったようだ。
気がついたら僕が降りる駅に近づいていた。

「それじゃ、僕はそろそろ降りるので」

「そうかい。なら、これを持っていきなさい」

お婆さんが渡してきたのはお守り。

「これは？」

「安全祈願のお守りだよ」

「どうやらくれるらしい。」

「ありがとうございます」

「いいのよ。久しぶりに若い娘と話せて良かったわ」

そのセリフに少し違和感を覚えた僕は、その間違いを訂正する。

「あの。僕、男ですよ？」

「あらやだ。そうなのかい？」

まさか女の子と間違われるとは思わなかった。

「はい。けど、女の子と間違われたのはこれが初めてです」

「そんなに可愛らしいのに、男の子なのねえ」
「ははっ」

そもそも中学に入ってから学校をサボってばかりだった僕は、あまり人から自分の評価を聞いたことがない。
三年生になってからは頑張って登校したけど、やっぱり毎日虐められていた。

「それじゃ、僕は降りるので」

「それじゃ、元気でね」

「はい。それとお婆さん」

「何かしら？」

「最近詐欺が流行っているので気を付けてくださいね？」
そう言っさつさと電車を降りる。

お婆さんはわかってなかったけど、僕の言葉には意味があった。

さつき話していたとき、偶然未来視が発動したのだ。

僕が見たのは、お婆さんが悪質な詐欺に何度も引っかかる様子だった。

忠告は少しでも僕の話聞いてくれたお礼だ。

発車したローカル線を見送ってから改札を出る。

何度か乗り換えをしたからか、時刻は既に夕暮れ。

早く新しい家に行って、大家さんに挨拶しなきゃ。

この時、僕は【遠見】を使うべきだった。

進んだ先に何があるのか、知っておけばあんなことにはならなかったのに。

夕暮れの中で（前書き）

第二話です。

次はどうしよう。

夕暮れの中で

オレンジに染まる並木道をひたすら歩く。

春とはいえ少し肌寒い風が僕の火照った頬を冷やしていく。

地図の通りに進めば商店街にでるはずだった。

僕は日が暮れる前に到着したかったから、自然と足もはやくなった。

角を曲がった僕が見たのは、何か（・・・）と闘っている少女だった。少女は手に持った細身の剣で目の前の黒い何かを切りつけ、トドメをさしたようだった。

倒れている黒い何かは人間のような形をしていたけど、顔がない。

少女は息絶えたソレを見ることもなく、ゆっくりと振り向く。

僕はその間、角に隠れて息を殺していたけれど

「そこにいるんでしょう？」

あっさりバレた。

観念して出ていこうとすると

「のぞき見とは良い度胸してるじゃない」

嫌な予感のする言葉をつけた。

駆け出す僕と追いかける少女。

逃げ足の速さには割と自信があったのに、少女はあっという間に距離を詰めてくる。

僕は走りながら左目に手を当て【未来視】を使う。

飛びかかってくる少女に後ろから心臓を刺され、前のめりに倒れる僕。

息も絶え絶えの僕から剣を引き抜き、歩き去っていく。

咄嗟に横に跳び、突き出される細剣をかわす。

少女は一瞬驚いたように表情を変えたが、そのまま細剣を横に振っ

て切りつけてくる。

これも後ろに跳んでかわし、そのまま方向を変えて駆け出す。しかし、大きな荷物を背負った僕と身軽な少女ではハンデが有りすぎる。

あっという間に追いつかれ、切りつけられる。

掠らせながらもかわし、そのまま走る。

流石に【心見】は使えないからそのまま【未来視】を使う。

少女が声を上げると、剣に光が収束していく。

「サファイア！」

蒼い光を纏った細剣を振りかぶる少女。

標的は前を走る僕。

「ハアッ！！！」

少女が裂帛の気合と共に剣を振り下ろすと光が剣から離れてこっちに飛んでくる。

そのまま成すすべも無くまっぴたつに切り裂かれ、内蔵をぶちまける僕。

未来を見終わったその時、ちょうど後ろから蒼い光が迫ってきていた。

無様に転がり、辛くも回避する僕。

「嘘っ?!」

後ろから少女の驚愕の声が聞こえてくるけど、かまってはいられない。

そのまま角を曲がり、裏路地に入る。

その後は振り返ることなく必死で走った。

「ハア…ハア…撒いたかな？」

笑っている膝を支え、息を整える。

ここまで走ったのは久しぶりな気がする。

……呼吸が整い、頭がハッキリしてくると矢継ぎ早に疑問が湧いてきた。

なぜ少女は剣を持っていたのか。

なぜ商店街に人が居なかったのか。

少女は、黒い影はなんなのか。

そして……少女はなぜ、僕を逃がしたのか。

考えれば考えるほど思考がドツボにはまっていく。

いつしか日は暮れ、辺りは真っ暗になっていた。

偶に通り返る通行人が、道の真ん中で考え込む僕をイタイ目で見
てくる。

「そつだ。アパートに……」

真っ白な視線で現実に帰ってきた僕は、一番の目的を思い出した。

腕時計を見る。

時刻は7時30分。

大屋さんの待ち合わせ時間はだいぶ過ぎている。

……遅れた理由、なんて説明しよう？

夕暮れの中で（後書き）

文章が拙くてすみませんm（＿）m。

初投稿ではありませんがあまり上手ではないです。

さて、この度 Beholder を読んでいただき、誠にありがとうございます。

これからも投稿していきたいと思いますが、如何せん作者も受験生。

不定期もなりそうですが、どうかこれからもよろしく願います。

大屋さん（前書き）

やっと仕上がったぜ！！

今回からあとがきにちよつとずつキャラ紹介や小ネタを載せていき
たいと思います。

生ぬるい目で見てください。

大屋さん

「とりあえず着いたけど……」
時刻は9時過ぎ。

散々迷つてようやく着いたのは良いものの時間が時間なためインターホンを押すのが躊躇われた。

今、僕は大屋さん宅のドアの前で突っ立っている。

勿論荷物はもつたままだ。

いい加減疲れた僕は、意を決してインターホンを押す。

「は〜い。少し待つてくださいね〜」

中から聞こえてきた声は以外にも若い女性のものだった。

ガチャリとドアが開き、美女が顔をのぞかせる。

「こんばんわ〜」

おっとりした人のようなだ。

「えっと、初めまして。入居者の在原です」

「ご丁寧にも〜。私はこの『赤羽根荘』の大屋をしている〜赤羽根 静っていいます〜」

よろしくね〜と手を振る静さんの笑顔は、暖かい何かに包まれている気がする。

「それで〜在原さんのお部屋は〜ここです〜」

大屋さんがのんびりした口調で案内してくれた場所は、『赤羽根荘』の二階の一番奥の部屋だった。

ここで僕の新しい生活が始まるんだ。

感慨に浸っていると、大屋さんが話しかけてきた。

「それでは〜質問はありませんか〜?」

「ないです。ありがとうございます」

「ヤバッ!!」

反転して駆け出す。

同時に【未来視】も使う。

しかし見えたのはあまりにも意外なもの。

暗かった。

ただ、どこまでも暗かった。

何も見えず、何も聞こえず、ただ暗かった。

「ウソだろ??!!」

そう。

黒い影に関する未来は何も見えなかった。

今まではそんなことは一度だって無かったはずの【未来視】は今回に限り、僕を裏切った。

目の能力が無ければ、僕も一般人に過ぎない。

今の僕にできることは必死で走ることだけ。

逃げ切る訳もないと知っていても、走るしかなかった。

大屋さん（後書き）

登場人物を解析しよう！ ～三鶴編 その1～

作者 「さあ！ 始めましたこのコーナー！ 今回のゲストは主人公の三鶴君！」

三鶴 「……何処ですかココ？」

作者 「細かいことは気にせずに！ ホラ、皆に挨拶して！」

三鶴 「まあいいです。皆さん初めまして。在原三鶴です」

作者 「……予想外なほど順応が早い」

三鶴 「いきなりテンション下がりましたね」

作者 「うん。三鶴君のノリの悪さに冷静になった」

三鶴 「自分で『冷静になった』なんて、痛々しいですね」

作者 「どのへんが？」

三鶴 「主に自分の状況を実況している当たりがです」

作者 「毒舌だねえ」

三鶴 「舌が回らないと生きていけなかったんです」

作者 「ま、その台詞に見合うだけの過去があることを期待してるぜ？」

三鶴 「僕の過去なんて知ってどうするんです？」

作者 「別に？ 本編に出すだけだよ？」

三鶴 「……嫌な予感がします」

作者 「そのへんは今は置いておこうじゃない。で、だ。まずは自分の身長体重から紹介してくれるか？」

三鶴 「そうですね。身長は173センチ、体重は56キロって所でしょうか」

作者 「ほうほう。趣味は？」

三鶴 「読書と料理です」

作者 「なるほど、引きこもってた割に良い趣味を持ってるんだな」

三鶴 「読書は元々好きだったけど、料理は妹に習ったんです」

作者 「どうせ部屋から引っ張り出されて一緒につくってたんでしょ？」

三鶴 「そうですね。おかげで一人暮らしには役立ってますよ」

作者 「あっさり認めちゃったよ」

三鶴 「別に恥ずかしがるような話じゃないでしょ」

作者 「んじゃ、次の質問。君にとって妹とは？」

三鶴 「大切な人ですね。できれば、僕のためになんて傷ついて欲しくないくらいに」

作者 「妹さんはそんな事思っていないみたいだけど？」

三鶴 「そこが厄介であり、嬉しいところですね」

作者 「……妹さんは美人？」

三鶴 「ええ。凄く可愛いですよ」

作者 「……このシスコン野郎」

三鶴 「うるさいです。中二病」

作者 「OK。君とは決着つけなきゃいけないみたいだ」

三鶴 「いいでしょう。相手になりますよ？」

「ただいま映像が乱れております 少々お待ちください」

作者 「勝ったぜ……」

三鶴 「作者権限使うなんて反則です……」

作者 「勝てば良いんだ。それに、このコーナーで負けたってペナ

ルティなんて無いんだから」

三鶴 「もし僕が勝つてたら？」

作者 「自信喪失で更新停止してた」

三鶴 「……危なかったですね」

作者 「お互いにね」

三鶴 「それより、時間大丈夫ですか？」

作者 「おっと、まずい。さて、次回のゲストも引き続き三鶴君だ。こっご期待！」

三鶴 「誰もあなたになんて期待してませんよ」

作者 「ウルセツ！」

暗闇の中で（前書き）

やっとこさ上がりました。

……もう少しペースダウンしようかな？

暗闇の中で

走る。走る。

暗闇の中をひた走る。

背後からは異形の影。

追いつかれればどうなるかはわからない。

いや、きつと殺されてしまうのだろう。

「クソッ！」

走っても走っても影は執拗に追ってくる。

それも付かず離れずの距離を保ちながら。

多分、僕が疲れて抵抗できなくなるのを待っているんだろう。

「いやらしい趣味をお持ちで！」

毒づきながら再度【未来視】を使う。

暗く、何も見えない空間がどこまでも続く。

そこに闇以外は何もない。

雲はない。

空もない。

地面すらもない。

「やっぱりか！」

舌打ちをして角を曲がる。

一体これで何度目なのか、数えるのはもう止めてしまった。

今の【未来視】でわかったことは三つ。

一つ目、あの影の未来はどう足掻こうと見えない。

二つ目、未来が見えない以上助けを望むのは無理。

そもそも、ここには人がいないから救援なんて最初から諦めてはいただけ。

そして三つ目。これが一番重要なんだけど……そろそろ体力が限界だ。

大幅に体力を消耗する【未来視】を連続使用したことに加えて、さつきからずっと走りっぱなしだから息が上がってしょうがない。

でも、どうしようもないのだ。

今できるのは走ることだけ。

限界まで走って、死期を伸ばすしかない。

走りながら思考を加速させる。

考える。考えるんだ。

今のところ、向こうから仕掛けてくることはない。

けど、立ち止まったら間違いなく殺される。

ならば走るしかない。

でも、それだと体力が無くなったら終わりだ。

否定を重ねて状況を打破するべく思考する。

このまま逃げ続ける。 却下。

立ち止まって迎え撃つ。 保留。

このままやられるのを待つ。 論外。

助けが来るのを信じる。 却下。

走りながら迎え撃つ。 保留。

目の力を使って一発逆転。……名残惜しいけど却下。
体術で撃退。保留。

この案の中で使えそうなのは、撃退の一点張りだった。
けど、こんな疲れて果てても撃退なんてできるんだろうか。

撃退戦（前書き）

その内アンケート取るかもです。

撃退戦

体力は限界。

足もガクガク。

それでも異形に相對する。

片や限界。

片や遊び半分。

勝負は目に見えている。

少なくとも、イレギュラーが入り込まない限り。

状況は最悪。

過去最大のピンチってくらい切羽詰っている。

今回ばかりはヤバイ。

生きて帰れるほうが奇跡だ。

震える足に鞭打って走り続ける。

追いつかれたら死亡確定。

そのまえに打開策を練らなければ。

意識が朦朧としてきた。

明らかに酸素が足りない。

それでも止まらない。止まれない。

もう道なんてわからない。

必死で駆け回るうちに、何時しか足元は砂利道へと変わっていた。

「ハア……ハア……げほっ、げほっ！」

根を上げそうな自分を叱咤し、寂れた廃工場に入り込む。

「ここなら多少は相手の自由を制限できるし、武器になりそうな物もそこらに転がっている。」

「アア？」

来たか。

足元の鉄パイプを広い、正眼に構える。

引き籠っていたとはいえ、妹から最低限の護身術程度は叩き込まれている。

情けない話だけど、今は凄く感謝している。

「アアアアアアアア！！！！」

単調に突っ込んでくる影の攻撃を受け流す。

予想以上に影の筋力が高く、腕が軽く痺れた。だが構ってはいられない。

痺れている腕を無理やり動かして一撃を加える。

影が咄嗟に飛び退ったせいで浅く入っただけだったが、影を逆上させるには十分だったらしい。

「アアアアアアアアアア！！！！！！」

「ヤバッ！」

単調だが重く鋭い突きを放ってくる。

紙一重でかわすと、後ろの廃材に穴が空いた。金属粉が飛び散り、喉を刺激する。

「冗談でしょ……」

廃材っていつても金属だよ？
それを素手で破壊って常識外れも良いところだ。
あんなの食らったらそこで終わってしまう。

「アア！」

短く叫び、突進する影。

パイプで受け流す僕。

こんなやりとりがもう軽く二十合以上も続いている。
いい加減に舞い散る金属粉が鬱陶しい。

でも、ここで集中を切らすわけにはいかない。

金属粉は視界を白く染めるほど舞い上がっている。

息が苦しい。喉が痛い。

それでも足掻く。

かわし続ける。

不意に眩暈がして、影の攻撃を受けそこねた。

酸素が足りなさすぎたらしい。

掠らせながら体を捻ってかわす。

体制の崩れた僕に放たれた影の次撃は、僕の手のパイプを弾き飛ばす。

倒れながらゆっくりと落ちていくパイプを見る。

次に影に目を移すと、腕を振りかぶっているのが見えた。

今までにない死の予感に身がすくむ。

でも、どうしようもない。

今の僕にはただ見ていることしかできない。

そのとき、僕の頭の中で警報音が鳴った気がした。
反射的に地面に伏せる。

瞬間、工場が爆発した。

当然中心地の僕も無事なわけがなく、圧倒的な熱量と爆音で全身が
軋む。

全身を焦がされる苦痛の中、僕は確かに見た。

のたうち回る影と、その後立った二人の少女。

少女の片割れは影に容赦なく止めを指し、もう片方は僕に向かって
歩いてくる。

口が動き、何かを言っているのがわかった。

僕が覚えているのはそこまで。

何を言われたかもわからないまま、僕の意識は沈んだ。

撃退戦（後書き）

展開がヤバイ……。

あと、ネタもヤバイです。

思わぬ再開（前書き）

やっと上がったぜ！

テンション上がってきたZ E

思わぬ再開

熱い……！

全身が焼けるように熱い……！

ぼんやりとした意識の底で藻掻く。

「う……グツ?!」

目覚めたとき、最初に感じたのは強烈な痛み。

全身余すところ無く激痛に襲われる。

そんな痛みの中で目を開くと、何故か何も見えなかった。

否、見えることは見える。

ただ、視界が真っ白な何かで覆われているだけだ。

光が入ってくるから、失明はしていないと思う。

「あれ……?」

なんで僕はこんなところにいるんだろう?

薬の匂いがするから、確認しなくても病院とか医療関係の建物なのはわかる。

問題は何故ここにいるのか。

僕は爆発に巻き込まれて完全に意識を失ったはずだ。

自分で歩けない以上、誰かが運んできてくれたに違いない。

だけど、一体誰が?

あの場に人は居なかったはずだ。

町中駆け回っても人影一つ見当たらなかったのに。

「やっと目が覚めたの？」

突然隣から聞こえた声に不覚にも驚いてしまう。

「ああ、今は目が見えないんだったわね。無理してこっち向かなくてもいいわ」

「えっと、どちら様でしょうか？」

「命の恩人に随分な口ね」

「名前も顔も知らないよ、素直に感謝もできないんだけど？」

「失礼ね。顔は知っているはずよ」

「顔？」

「商店街のこと、もう忘れたのかしら？」

冗談じゃない。

もし、彼女が商店街で会った少女と同一人物だとしたら、いつ何をされるかわからない。

自然と警戒レベルを上げていく。

しかし、その警戒も彼女の次の一言で否定された。

「そんなに気を張らなくても平気よ。私はもう、あなたと敵対する気はないもの」

「……その理由は？」

「あの影に襲われてたでしょう。アレの標的にされるといふことは、少なくともアレの仲間では無いからよ」

「グルだって可能性は？」

敢えて鎌をかける。

「それは絶対に無いわ。アイツ等は連携をとることはあっても、同族殺しは絶対にしないもの」

……なるほど。筋が通っている。

「分かった。一先ずは君のことを信じる。けど、そろそろ名前を」

「いけない、もうこんな時間だね。私、もう行かなくちゃ」

「白々しいんだけど」

「気のせいよ」

しれっと言う少女に僅かに苛立ちを覚える。

人が立ち上がる気配がし、出口に向かって歩いていく。

「じゃあね。次は学校で会いましょう。在原三鶴君」

結局、彼女は名乗らずに出て行ってしまった。

「なんだっただ？」

思わぬ再開（後書き）

現在、ストックも幾つかありますがその内切れると思います。
なにとぞ、ご容赦を。

診断結果

その後の検査で分かったことが二つ。

一つは火傷の痕。

幸い時間が経てば殆ど消えるそうなのだけど、左目と左腕にだけは痕が残るかもしれない。

痕のことはあまり気にならないけど、しばらくは包帯を巻きっぱなしだから【未来視】は使えない。

それまで僕は迫ってくる危険から身を守る術が無い。

二つ目は骨折。

実の所、こつちの方がずっと厄介だった。

左腕、両足および肋骨を少々。

諸々引っ括めて全治半年。

少なくとも両足が治るまでは車椅子生活を余儀なくされる。

正直、すごく面倒くさい。

後、僕は丸々三日間寝ていたらしい。

看護師さん（なぜか僕と同じ年らしい）に新聞を読んでもらった結果、工場の爆発は三日前の出来事と化していた。ついでに爆発の件は不慮の事故として片付けられているようだ。

それから、僕にとって一番大切なことがあった。

高校の入学式だ。

とりあえず今のところ、一週間は絶対安静なので学校に行けない。非常に残念だ。

あの少女の正体も気にかかるし。

……ようやく、普通に学校に通えると思ったんだけどな。

「在原さ〜ん。起きてますか〜?」

一人ですることもなくぼおつとしてたら誰かが病室に入ってきた。多分、声で判断すると大屋さんだろう。

ぼんやりと間延びした声は健在だ。

「はい。大丈夫です」

「よかつた〜。一時は死んじゃうんじゃないかって心配しました〜」

さつき大屋さんがここに来る前。

一本の電話がかかってきた。

電話にでて、最初に聞こえたのは嗚咽。

それと鼻声。

大屋さんは取り乱していた。

声が裏返り、矢継ぎ早に質問する大屋さんを宥めるのは大変だった。そして後悔した。

初対面に近い僕をこんなに心配してくれるような優しい人を泣かせてしまったことを。

だからもう心配をかけないように笑みを浮かべる。

「すみません」

「いえいえ〜。そうだ〜。林檎、食べますか〜?」

「……お願いします」

少し考えた結果、厚意に甘えることにした。のだが。

「はい、在原さん。あ〜ん」

「いや、渡してくれれば自分で食べられるんですが……」

「何言ってるんですか。そんな包帯だらけの人に渡せる訳がないでしょ？」 はい、あゝん

「えっと、その」

「はい、あゝん」

「……」

結局、逆らう気の起きなかった僕は頬を熱くしながら食べさせてもらった。

林檎は凄く美味しかったです。はい。

勧誘（前書き）

遅れました……

あと、短いです。

なにとぞご容赦を……

勧誘

入院生活三日目。（実際は六日目）

もう顔の包帯は大体取れ、物も問題なく見える。

おかげで看護師さんの顔もよく見えるようになった。

いや、声だけだと判断付きにくいからさ。

ちなみに相当な美少女でした。

今日もいつもと同じく、大屋さんがお見舞いに来てくれた。

（恥辱プレイはもう勘弁願った）

仕事があるそうで、午後には帰ってしまったけど。

ただ、その後の来客には少し驚いた。

訪ねてきたのは会ったこともない金髪の少女だった。

しかし、向こうは僕のことを知っているらしく、笑顔で話しかけてきた。

流暢な日本語で。

それもかなり毒を効かせて。

「凄い！ あんな怪我したのにもう起きれるなんて、あなたゴキ○
リの親戚か何かなの？」

……なんだろう。

心が痛い。

凄く痛い。

少女は気付かず、続けてしまう。

「本当に凄い生命力ね。何？ あなた、虫から進化したの？」

まさか虫から進化したと言われるとは思わなかった。
いやいや、立派に猿から進化しました。
目はどうだか知らないけど。

「えっと、どなたさま？」

「ああ、忘れてたわね。私は上代 佳苗。あなたは在原 三鶴ね」

一応、少女 佳苗は名乗った。

「佳苗？ 金髪なのに日本姓？」

「別に深い理由は無いわ。お母さんが元アメリカ人だったってだけで、今は日本国籍を持ってるんだもの」

ああ……そゆこと。

「それで、佳苗さんは僕に何の用があるの？」

「今日はあなたにお願いがあつて来たの」

フツ、と笑顔の種類を変えて言う。

「あなたのその力……私たちに貸してくれない？」

「僕の力？」

「とぼけないで。あなたは特別な力を持っている……そうでしょう？」

「えっと……いきなりそんなこと言われても……」

僕が返答に困っていると、意外な人物から助け舟が入った。

「そこまですてちょうだい。佳苗」

「涼香……」

入り口に立っていたのは、商店街の少女だった。

勧誘（後書き）

登場人物を解析しよう！ ～三鶴編 その2～

作者 「さあ！ 大分間は空きましたが、引き続き質問を続けて行きたいと思います！ なお、今回のゲストは三鶴君が入院してしまつたため、暫定的に大屋さんになります」

大屋 「どうもです」

作者 「こんにちわ、大屋さん」

大屋 「こんにちわ、作者さん」

作者 「それでは今回は大屋さんに質問に答えていただきますよう」

大屋 「よろしくお願いします」

作者 「Q1！ 大屋さんは三鶴君をはじめて見たとき、どんな人物だと思いましたか？」

大屋 「そうですね。なんだかとっても悲しそうなお目をしていました。後はですね。笑顔がとっても可愛いと思いました」

作者 「なるほど。それではQ2！ 大屋さんにとって、三鶴君はどんな存在？」

大屋 「うん。なんだか、年の離れた弟のような感じですね。ほっとけないような気がするんです」

作者 「……三鶴君は幸せ者だよ」

大屋 「はい？」

作者 「いえいえ、なんでもありません。それでは、これ以上はネタバレに繋がるかもしれないので、続きはまた今度！」

大屋 「はい」。さよならです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3861u/>

Beholder

2011年10月8日17時12分発行